
収穫

はなの

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

収穫

【コード】

N5866A

【作者名】

はなの

【あらすじ】

僕は旅をしている。「恐いのよ」と彼女は言った。「またパンクするの？」。「そうね。またパンクして職場から三十分の道のりを歩くのが」くたびれた軽トラック。降りてきたのは白髪頭で色黒のこぢんまりとしたおじいさんだった。

パンク（前書き）

ページを開いてくれて有難うございます。一言でも、文句でも構いません。感想を頂けたら嬉しいです。

収穫

パンク

十年勤めた会社に長期休暇を申請し、僕は自転車で旅に出た。

旅は大学生の頃からの夢だった。でも当時は時間があっても金は無く、夢のまま終わらせるしかないと思っていた。今旅に出るきっかけとなったのは、五年間同棲していた彼女が突然家を出て行ったことだった。

僕たちは運命的な出会いだったわけじゃなくて、情熱的に愛し合ったわけでもないし、絶世の美男美女でもない。ありふれた出会いにマンネリ化したデート、そして平凡な顔立ち。だけどそれで幸せだった。と、感じていたのはどうやら僕だけだったようだ。彼女は出て行き、僕は取り残された。

旅に出てもう少しで三週間。現時刻、午前七時三十五分。僕は真夏の日差しを遮ってくれる、小さい田舎の林道脇で腰を下ろしていた。休憩ではなく、この旅で三回目のパンク修理中だ。日差しは遮られているとはいえ、真夏の太陽はやはり暑い。汗が幾筋ともなつて流れ落ちる。修理する手を止め、林道脇の草むらに仰向けに寝転んだ。

自転車のパンクといえば、突然家を出て行った彼女もパンクをしたことがあつたつけ。

「ただいまあ……」

不機嫌そうに鍵を開けて入ってくる彼女に僕は「お帰り。どうした？　なんかあつたの？」と聞いた。彼女は鍵も閉めず靴も脱ぎ捨て、傍らに佇んで彼女の言葉を待つ僕の存在なんか気にしない様子で、乱暴に家上がった。ダイニングキッチンを素通りし、リビングにある二人掛けのソファにドスンと投げやりに腰を下ろす。天を仰ぎ、おおげさに大きなため息をついた。

「仕事が終わって自転車に乗ったの。なんかやたらにペダルが重い気がして調べてみたら、後輪がパンクしていたのよ」

「それは気の毒だったね。じゃあ、歩いて帰ってきたの？ たぶん歩くと三十分くらいかかるよね」と話しながら僕は彼女の横に座った。

「気の毒なんて言葉じゃ足りないわ。だってパンクの原因は、釘が刺さっていたのよ！」

「刺さったのに気が付かなかったか、誰かのいたずらか」と僕が言い終わらないうちに彼女は僕の言葉を遮り「絶対いたずら！」と言った。

「なぜそう思うの？」

「近くに私立の小学校があるの。私の通う小さな印刷会社は、その小学校の通学路上にあってね、きつと勉強に疲れた小学生がやったに違いないわ」

時々彼女は物事を頭ごなしに決め付けるということを僕は知っている。

「近くに小学校があるっていうだけで犯人にされてしまうのは、少し気の毒なような気がするな」

「いいえ、初めてじゃないわ。前にも職場の人の自転車に釘が刺さっていたことがあったのよ」

これ以上彼女に何か言っても逆撫でするだけだ。なぜなら彼女は僕の話なんか聞いてはいないし、むしろ耳障りらしい。時々彼女はヒステリックな怒り方をする。だけどそんな時の対処法を僕は知っている。

彼女はまだ聞き取れないような声で何か言っていた。聞き取れないがたぶん、なんで自分の自転車を狙ったのか納得がいかないとかそういうことだ。

ソファの横には背の低い台が置いてあり、下には電話帳が、上には電話が置いてあった。彼女は電話帳を手に取り、自転車屋を調べ始めた。

僕は大学生の頃、趣味が自転車だった。バイトで貯めた金で、競輪選手が乗るようなドロップハンドルの自転車に乗っていた。あの頃はよく自転車を分解しては好きなパーツを組み込んだものだった。「僕が直すよ」それを聞いて彼女は一瞬電話帳をめくる手を止め僕の顔を見上げた。

「ダメ」それだけ言うともた電話帳をめくり始めた。

「信用できない？ これでも僕は」また彼女が僕の言葉を遮る。しかし今までのように威圧的な遮り方ではなく、諭すような遮り方で僕を見つめながら話し始めた。

「違うの。例えば、ね、あなたが私の自転車を直すとするじゃない？ 信用はしているし、あなたが自転車に詳しいことも知っているわ。でも万が一上手く修理できていなくて、それで私がケガをするようなことがあっても私はあなたを責めることはできないの。だってあなたはよかれと思ってやってくれたんだもの。でも自転車屋さん頼んで同じ過ちをした場合、私は自転車屋さんを訴えられるでしょ」

「なるほど。つまりぼくという無能な人間には直してほしくないんだね」

一瞬間があり、彼女は笑い出した。

「ほんとだ、そう聞こえるわね。でも、ごめんなさい、悪気があったわけじゃないの。その、ただ恐いのよ」

「またパンクするのが？」

「そうね。またパンクして職場から三十分の道のりを歩くのが」そう言い終わると彼女は笑った。彼女の笑顔を見て僕も笑った。

彼女は笑うと機嫌が元に戻るのだ。これが、最善の対処法だということ僕は知っている。そして僕はやっぱり信用されていないみたいでちよつと傷ついたけど、彼女が笑顔に戻ったのだからよしとするか。

結局、あの後彼女は自転車屋さんパンクを修理してもらいに行

つたんだつたなあ。

暑さは相変わらずだったが、僕はまだ寝転んでいた。するとかすかな音が聞こえてきた。どうやら今来た道から車が来るらしい。音は次第に大きくなる。僕は長旅で疲れていたし、旅に出て初めて彼女を思い出し少し気が滅入っていたので起き上がる気になれず、そのまま寝転んでいた。車はくたびれた白い軽トラックで、ガタガタと揺れながら土煙を上げて僕の前を走り去っていった。が、五メートルほど過ぎたあたりで停車した。自転車で旅をしていて、時々疲れでは道端にへたりこんだり、今回のようにパンクして道端に座ったりしている、心配して声を掛けてくれる親切な人がいる。きつとこのくたびれた軽トラックの運転手も、そんな優しい人の一人だろう。

車のドアが開き、中から白髪頭で色黒のこぢんまりとしたおじいさんが降りてきた。頭は角刈りで、くたびれて少し土色をしているTシャツに、土が付いた紺色のニッカズボンと、乾いた泥だらけで白っぽくなっているがおそらく黒かったであろう長靴を履いている。「おい、生きてるか？」

やっぱり心配してくれている。僕は声を掛けられた時、「大丈夫です。休んでいるだけですから」と言っている。親切はとても嬉しいが、せつかく一人旅なのだから誰の手も借りずに自分だけの力で旅がしたかったからだ。

たいていこれを聞いた人は去って行く。だからこの白髪頭で色黒のこぢんまりとしたおじいさんも去って行くだろう。

白髪頭で色黒のこぢんまりとしたおじいさんは言った。

「なら、ちよつと荷物運ぶの手伝ってくれ」

僕は一瞬何を言われたか分からなかった。しかし白髪頭で色黒のこぢんまりとしたおじいさんは、僕の荷物である自転車と、振り分け式のバッグ二つ、スポーツバッグ一つを荷台に積み始めたので、なんとなく流れで助手席に乗ってしまった。

收穫

第二話 ハヤシライス（前書き）

ページを開いてくれて有難うございます。一言でも、文句でも構いません。感想を頂けると嬉しいですよ。

収穫

第二話 ハヤシライス

車の中は何も無かった。タバコも、飲み物も、ゴミさえ落ちては
いなかった。ただ埃っぽくて、外と匂いは変わらなかった。白髪頭
で色黒のこぢんまりとしたおじいさんは、ぽつりぽつりと話をした。
名前は五郎さんということ、一人暮らしをしていること、これから
とうもろこしを収穫しに行き、隣町の八百屋さんに売りに行くこと
でも最近痛めた腰が痛くて荷台に上げられないこと。

その日僕は、生まれて初めてとうもろこしを収穫した。そして全
てを終える頃にはすっかり日が暮れていた。店から出てきた五郎さ
んは、

「今日はもう遅い。うちに泊まってけ。大したもんは食わせられな
いが、お礼に夕飯を作ってやるから」

昨日までの僕なら絶対に断っていただろう。一人旅を自分だけの
力で完結させるために。しかし今日の僕は違っていた。馴れない作
業からくる極度の疲労に、思考は停止していたのだ。断っておくが、
テント生活に疲れ布団が恋しかったわけでも、食事に釣られたわけ
でも、ましてやあわよくばお風呂に入りたいだなんて思っただけな
い。断じてない。ただ、五郎さんの好意を無碍に断るのもどうか
なあとか、もつと五郎さんと話してみたいなあとか、そのほかにも色
々あつてえ、

「すみません。お言葉に甘えさせてもらいまあす！」ってことにし
たのだ。

五郎さんは僕の言葉を聞くと、了解の合図なのか下を向き左手を
軽く上げた。二人でくたびれた白い軽トラックに乗り込み、町から
三十分ほど離れた五郎さんの家へ向かった。

収穫

五郎さんの家は、田んぼの真ん中にぽつんとたたずんでいた。家

の前の道は狭いながらも舗装されている。ひび割れてはいるけれど……。家は土色をした壁なのかと思っただが、よく見たら埃っぽい白い壁だった。屋根はくたびれたような青色で、まずまずな広さの平屋だった。

となりには錆びれた赤い屋根の納屋が並んでいる。

五郎さんは納屋の前に軽トラックを停車させ、エンジンを切った。「着いたぞ。ボロ屋だがな、寝泊りぐらいはできる」

そう言うと五郎さんは鍵を抜き、車を降りた。それを見て僕も車から降りた。五郎さんは車に鍵も掛けずそのまま家へ入って行ってしまったので、僕はあわてて荷台にある荷物を引き摺り下ろし、着いて家へ入って行った。

玄関を入ると五郎さんの姿は無かった。電気を点けてくれてはいるが薄暗く、先には黒ずんだ廊下が続いていた。左右には部屋があるらしく襖が閉まっている。廊下の奥の部屋からは明かりが漏れていた。

「お邪魔します……」

誰も聞いていないのは分かっているが無断で上がる気になれず、小声で誰にも無く断りを入れてみた。玄関には五郎さんの物とおもわれるくたびれたサンダルが一つと、今まで履いていた長靴がバラバラに脱ぎ捨ててある。僕は遠慮がちに隅へスニーカーを脱いだ。玄関を上がると、永い眠りから覚めたかのように床がきしんだ。壁も床も埃っぽく、外と車の中と家の中は、みんな同じ匂いがした。

明かりの漏れる木の戸を開けると、真ん中にテーブルと椅子が四つ置かれたキッチンだった。五郎さんは料理に取り掛かっているらしく、背中を向けたまま

「荷物は隣の部屋に置くといい。すぐに風呂の準備ができるから、先に風呂に入れるよう準備しとけよ」

「すみません。ありがとうございます」

僕の言葉を聞くと五郎さんは背中を向けたまま、にんじんを持った左手を挙げた。

「明日は茄子の収穫だから、手伝ってけ」と、向かい合わせに座り食事をしていると、ふと思い出したかのように五郎さんは言った。

僕は旅の途中だ。これ以上五郎さんに甘えるわけにはいかない。

「手伝いたいです、旅の途中ですから」

「日本は小さい島だ。そんなに急いでどこに行くんだ？」

僕は思わず笑ってしまった。西へ西へ旅してきたけれど、そうか、島国だったんだ。どんなに走り回ろうが、所詮島の中なのだ。この五郎さんの一言で、僕の明日は決まった。

隣の部屋に敷かれた布団へもぐりこむと、布団は埃っぽい太陽の匂いがした。仰向けになり、しみがあちこちに付いている天井を眺めた。素朴で美味しい食事に満たされた腹、熱めの風呂でほてった顔、馴れないともろこしの収穫で疲れた体。どれも変わりなく僕のものであり、僕の間違った。だが頭だけは、何かを無理やりたくさん詰め込まれたように重くなっていた。まぶたは眠くて開かないというのに、頭の中に詰め込まれた何かは僕を容易に寝かせてはくれない。頭に詰め込まれた何かはしっかりと僕の意識を掴んでいたのだ。彼女の記憶が甦る。

小さな印刷会社の事務は彼女一人だったため、僕より帰りが遅い日もあった。食事は先に帰った方が作ることになっていたので、帰るときは携帯電話のメールで連絡しあった。その日は彼女が先に帰宅し食事を作ってくれていたのだが、僕が家の最寄り駅に着いたとき、彼女から携帯電話に電話があった。

「もしもし。どした？」

僕が電話をとると、電話の向こうで何かを炒める音が聞こえてきた。

「あ、ごめん、あのね、ハヤシライスの、ルーを、買ってきて！」

電話を片手に炒め物をしているらしい。

「分かった、ハヤシライスのルーだね。夕食が何か、楽しみだよ」
「そうね。野菜を炒めて、煮込んで、ハヤシライスのルーを入れたら何ができるかしら？」
「楽しみにしていてね」

僕は帰り道にあるスーパーへ寄った。スーパーはあと三十分で閉店の時刻となるらしく、客はまばらだった。入り口を入るとすぐにケーキコーナーがある。閉店間近のケーキコーナーは、今日の分をさばくために全品が五十円引きとなっていた。たまにはケーキを買って帰るのもいいな。五分ほど迷って、チーズケーキとチョコレートケーキを一つずつ買うことにした。

「ただいまあ」

「お帰りなさい」

僕を玄関まで迎えに来てくれた彼女に、ケーキの箱を見せた。

「わあ！ ケーキ？ 今日は記念日なんかじゃないし、どうしたの？」

「安かったから買ってみた」

「嬉しい！ ケーキ大好き！ でも、特別な日以外に買うとケーキの価値が下がりそうでなかなか買えないのよね。だからこそ、突然買ったりと嬉しいの！ 中を見てもいい？」 彼女は僕の予想以上に、突然のケーキを喜んでくれた。

「もちろん」

彼女はケーキを受け取ると嬉しそうに、でもケーキを壊さないようすり足で急いでキッチンへと向かった。

「チョコレートケーキ！ こっちはチーズケーキ？」

「当たり前。好きなほうを一つだけ、ひいとおっうだあけえ、選んでいいからね」

「ふふふ、もう！ 二つも食べたらないわよ！ さて、ケーキは食後の楽しみにして、食事にしましょう。で、ハヤシライスのルーは？」

「えっ!? えーっと。ケーキの箱の中に入ってなかった?」

「チョコレートケーキとチーズケーキしか入ってなかったわよ。まさか買い忘れ……」

「あっ! じゃあその黒い方がハヤシライスのルーじゃないかな」

「へえ。私にはチョコレートケーキにしか見えないけど?」

ぼくは焦りを隠しながらひきつった笑みを浮かべ、

「新商品。かな?」と言ってみた。が、

「へえ……」と、彼女は冷めた目で僕を見つめた。だよ。騙せるわけではないよね……。僕は玄関の方へ後ずさりしながら言った。

「冗談です、すみません……」

彼女はいじめっ子のスイッチがオン。

「で、ルーは?」

「えーと、今、買ってきます」

いじめっ子トップギア。

「三分以内に帰ってきてね」

「無理です! 往復するだけで五分は……」

いじめっ子フルスロットル。

「ただいま五秒経過……」

時計を見ると、今ちょうど閉店する時間だった。まずい。まずすぎる。僕は玄関を飛び出した。

「ただいまぁ……」

「買ってきた?」

「僕はハヤシライスより、コンソメを入れて野菜スープにしたほうがいいと思う。だってさ、ほら、ケーキのカロリーが高いからさ、ここは低カロリーの野菜スープにした方が体にいいと思うんだ。例えばポトフなんてどうかな」

彼女は笑いをこらえた表情で言った。

「買えなかった、のね?」

「すみません……」

結局僕たちは野菜スープを食べた。とてもたくさん野菜スープ

を。

彼女は笑って許してくれた。その代わり一年くらい笑われ続けたっけ。あの時焦っていた僕の顔は、彼女いわくとても面白かったらしい。

僕は翌朝、五郎さんに起こされた。いつの間にか眠っていたのだ。

第三話 ペダル(前書き)

ページを開いてくれて有難うございます。一言でも、文句でも構いません。感想を頂けると嬉しいです。

収穫

第三話 ペダル

今日は茄子を収穫した。また隣町の八百屋まで売りに行き、またまた日が暮れていたので五郎さんに夕食をご馳走になった。

「明日は隣近所のばあさんがな、茄子を収穫するそうだ」

と、向かい合わせて食事をしている五郎さんが言った。僕は今日収穫した茄子で作った焼き茄子を頬張りながら、

「そうですか。茄子が流行っていますね。この焼き茄子、最高に美味しいですよ」

五郎さんは僕の相槌にも褒め言葉にも触れず、今日収穫した茄子と揚げで作った味噌汁を一口すすると、

「そのばあさんは、じいさんに去年先立たれてな。子供は遠くで暮らしているから、一人もんなんだよ」

この町は過疎化が進んでいるのだな。そう思いながら僕は筑前煮のにんじんを頬張った後こう言った。

「それはお気の毒に。寂しいでしょうね。この筑前煮も、最高に美味しいです。なんか懐かしい味と云うか……」すかさず五郎さんは

「だろ？ よし、じゃあ決まりだ。明日の収穫はお前も手伝え」

忘れそうになるが、僕は今旅人である。だからこれ以上留まることはできない。僕は筑前煮の蓮根を食べ、飲み込んでから言った。

「五郎さん。さんざんお世話になっておいて申し訳ないんですが、僕は旅の途中なんです。一箇所に留まるわけにはいきません。でも、この美味しい筑前煮のご恩は忘れません。旅が終わったら、お礼をしにまた伺いますよ」

五郎さんは筑前煮の鶏肉を箸で突き刺し、僕をじっと見つめてこう言った。

「この美味しい筑前煮はな、そのばあさんが作っておすそ分けしてくれた物なんだ」

「手伝います」

僕は筑前煮のお礼を、さっそくすることになった。

五郎さんはいつもこんな調子で、僕はいつもこの通りで、結局二週間もお世話になってしまった。この辺りの作物は、みんな僕が収穫してしまっただんじやないか？ というほど働いた。さて、自転車も修理できたし、そろそろ行かなくては。

僕は明日出立することを五郎さんに告げた。

「そうか。そういえばお前は旅の途中だったんだな」

僕も忘れそうになっていたけれど、五郎さんは完全に忘れていたんじゃないだろうか？

夕食後、五郎さんは一升瓶を出して晩酌してくれた。二人ともお喋りではないので、のんびりと、ぼつりぼつり話をした。

そろそろ寝ようということになり、僕がコップや食器を流しに運び、五郎さんはそれを洗った。コップや食器を運び終えてしまうと、あまり泡立ちのよくないくたびれたスポンジでコップをゴシゴシと洗っている五郎さんの

背中を眺めていた。きしむ床、薄暗い廊下、しみのある天井、太陽と埃の匂い、それらの持ち主の五郎さん。お互いの存在を確認しあっているように、全てが揃うとしっくりとなじみだした。きつと五郎さんは、たくさんものを失いながら生きてきたのだろう。そしてここに辿り着いた。五郎さんにとって、ここが到着点なのかもしれない。だから全てがしっくりくるのではないか、そんな気がした。

旅立ちの朝、五郎さんが昨日の残りで簡単な朝食を作ってくれた。食べ終わると僕が食器を洗った。その間僕たちは、当たり障りのない会話をした。今日は天気予報によると一日中晴れているらしいとか、セミがうるさいとか。

まとめてあった荷物を担ぎ玄関を出た。納屋から自転車を出し荷物にくくりつけると、旅らしくなってきた。二週間前まで乗り慣れ

ていた自転車は、懐かしさすら感じる。さて、とうとう五郎さんとお別れである。サンダルを履いて見送りに出てきてくれた五郎さんに、僕は深々と頭を下げた。

「お世話になりました」

「いやいや、こちらこそ楽をさせてもらったよ。旅の途中に長々と引き止めてしまつて悪かつたな」

「いえ。今度、お礼をしに改めて伺います」

「いんや、巢立った鳥は、巢には帰らんもんさ」

そう言つと五郎さんは照れくさそうに笑い、背を向けて家に入つていった。五郎さんの姿が見えなくなるまで見つめていると、最後に背を向けたまま左手を挙げて挨拶をしてくれた。さて、出発しよう。

一週間ぶりにまたがった自転車に、少し違和感を覚えた。ペダルを漕ぎ出す。軽快に、とはいかずなんだか重々しい。僕は一度だけ五郎さんの家を振り返つた。目に焼き付けるように。そして僕は走り出す。

やがて自転車が体に馴染み始めると、五郎さんと出会つた林道が見えてきた。僕はもう止まらない。僕だけの到着点に辿り着くまでは。見上げると空は、何十にも重なつたような深い青色をしていた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5866a/>

収獲

2008年11月7日08時24分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。